

尻別川におけるイトウの生息状況と保護

<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

北海道後志地方を流れる尻別川（流域面積約1640平方km）は、日本最大のサケ科魚類イトウ（*Hucho perryi*）野生個体群の生息南限とされる。古くからイトウ釣りのメッカとして知られ、体長1mを超えるような大物が、あまたの釣り人たちを魅了し続けてきた。年配の釣り師の中には「メータークラスを年に100本以上、30年にわたって釣り続けてきた」と豪語する名人もおり、この間、イトウ個体群は非常に健康な状態で維持されていたと考えられる。

ところが1980年代以降、イトウはめっきり釣り人の針に掛からなくなる。この時期、おもに河川改修や河畔での農地開発にともない、尻別川の自然環境は急速に悪化していた。あの美しかった尻別川がこのまま失われてしまうのではないかと危機感を抱いた地元の釣り人たちは1996年、魚類研究者らとともにNGO「尻別川の未来を考えるオビラメの会」を設立。2001年にはイトウの尻別川個体群（＝オビラメ）復元を目標に掲げる「オビラメ復活30年計画」を立案し、具体的な対策に乗り出している。

第1は、尻別川におけるイトウ個体群の絶滅要因を特定すること。研究者の協力を得て、尻別川流域全体を対象にしたセンサスが行なわれた。その結果、流域内にイトウ繁殖の痕跡はほとんど発見されず、「個体群としてはすでに崩壊状態」という現状が確認された。捕獲禁止などの消極的な保護措置では、もはや個体群回復は難しいということが判明した。

そこで第2に、個体群復元のために「再導入法」というより積極的な手段が選択された。尻別川で捕獲した親魚を畜養し、人工採卵・授精によって得たストックをもとに、人工的に放流する魚たちを呼び水にして個体群を再生する試みである。再導入は国際自然保護連合や日本魚類学会が定めるガイドラインに準じて慎重に進められ、2004年に初めて標識魚を放流。現在もその追跡調査と、調査結果に基づく再導入手法の改訂が続いている。

上述のガイドラインも指摘するように、再導入の前提として、絶滅要因の排除は絶対に欠かせない。最初の再導入エリアは、綿密な踏査に基づいて流域内で最もイトウ繁殖に適していると考えられる環境が選ばれたが、それでも5基の落差工による河川分断という大きな障害を抱えていた。そこで第3に、河川事業者（行政機関）との協働体制による落差工改修（魚道整備）が進められることになった。また、改正河川法に基づく新たな河川整備計画づくりに地域NGOとして参画し、イトウ尻別川個体群の保全・復元を今後の河川整備計画に盛り込むことを提案している。

尻別川における野生イトウ個体群の保全はいまだ道半ばだが、地元NGOと研究者、サポーター、そして行政機関による協働が実を結べば、かつてのように健康なイトウ個体群が泳ぎ回る尻別川が復活するかもしれない。その姿を見届けたら会員たちはグループを解散し、再び尻別川でイトウ釣りを心ゆくまで楽しみたいと夢見ている。

初出 平田剛士「2007年度魚類学会公開市民講座／北海道淡水魚保護フォーラムNo.8 in 札幌」講演要旨

オビラメの会のあゆみダイジェスト

1996年	オビラメの会結成
1998年	京極町内で親魚捕獲に初成功、人工孵化に向けて倶知安町内で飼育を開始
1999年	
2000年	オビラメニューズレター創刊 インターネットサイト開設 北海道希少野生動物保護条例への意見書提出
2001年	オビラメ復活30年計画を策定 再導入のための候補地を探索・評価 「尻別川の新しいルール」のご提案
2002年	イトウ保護フォーラムをニセコで初開催
2003年	デカ捕獲、採卵に初成功 稚魚50匹孵化
2004年	デカから再び採卵成功 オビラメモニタリングチーム結成 選定した放流地点の事前モニタリング実施 倶登山川水系にイトウ稚魚を初放流
2005年	倶知安東小、ニセコ近藤小、宮田小に稚魚飼育を委託 デカ死去 2度目の放流を実施 尻別川の魚を守る呼びかけ事業（北海道後志支庁）への協力 ニセコ町内に幼魚飼育水槽「ヌブリの森水」を新設 後志支庁長、倶知安町長に倶登山川落差工改修要望
2006年	ニセコでイトウ復活大会議開催 尻別川圏域河川整備計画検討委員会への参加 IUCNがイトウをCrに指定 尻別川整備計画検討委員会あて「尻別川イトウ個体群復元に向けてのご提案」
2007年	ノリカから初めて採卵成功 後志支庁・魚道整備環境配慮検討会への参加 倶登山川水系に稚魚放流
2008年	倶登山川1号落差工改修工事開始（後志支庁農村振興課）